Osaka University Knowledge Archive

Title	外来化学療法を受ける患者にとっての悪性リンパ腫とともに生きる体験
Author(s)	許田, 志津子; 葉山, 有香; 大石, ふみ子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2011, 17(1), p. 7-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56898
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

-原　著-

外来化学療法を受ける患者にとっての悪性リンパ腫とともに生きる体験

許田志津子[1]、葉山有香[2]、大石ふみ子[2]

要　旨

自宅での生活を維持しながら外来化学療法を受ける悪性リンパ腫患者の体験を当事者の視点から記述することにより、悪性リンパ腫とともに生きる体験を明らかにすることを目的とした。悪性リンパ腫とともに生きる体験をどのように捉えているか自由に語ってもらい、本人の語りを現象学的アプローチを参考に質的記述的に分析した。悪性リンパ腫患者は、『悪性リンパ腫罹患に伴う苦悩におびやかされ打ちのめされまいと懸命な努力をする中で、周囲に支えられながら気づきを得る体験を積み重ねていくようになる。この体験を礎にして、立ち上がる努力を始め、人生のコントロールを取り戻していく。がんをかかえて生きることへの不安は消えず、他の人と苦悩を分かち合えない孤独を感じるが、人生のコントロールを取り戻したことに力を得て、「私」の深まりと生の充実や、感謝、平穏を獲得する』という体験をしていた。

キーワード：生きる意味、語り、悪性リンパ腫、外来化学療法

I.　はじめに

がん化学療法においては、新規抗がん剤の開発、副作用に対する支持療法の進歩、特定機能病院を中心とした診断群分類別包括支払い制（DPC；Diagnosis Procedure Combination）導入、外来化学療法の加算導入、診療報酬改訂による在院日数短縮化、QOLの向上などの要因で、治療の場が入院から外来通院へと移行し、外来で化学療法を受ける患者数は増加してきている[1)]。

外来化学療法では、常に医療者が側にいるわけではないため、副作用を緩和できるよう患者本人がセルフケア能力を獲得していく重要性が指摘されている[2),3),4)]。このような変化の中で、入院よりも外来で化学療法を受けるほうがQOL（Quality of Life）が高かったとの報告[5)]もあるが、一方で、再発や副作用への不安を抱いて生活していることも示されている[6),7)]。これらのことから、患者は、自宅での生活を維持しながら化学療法を受けるために、様々な問題に対処し、生活上の努力や工夫をしていると推察される。このような状況においてがん患者が自らを立て直し、闘病を続けることについての研究[8),9),10),11)]も多い。

しかし、悪性リンパ腫患者を対象にした研究では、造血幹細胞移植を行う患者を対象にした研究は多い[12),13),14),15)]が、自宅での生活を維持しながら化学療法を受ける患者を対象にした研究は少ない。悪性リンパ腫ではプロトコールによっては外来での治療が可能[16)]であり、自宅での生活を維持しながら化学療法を受けるためには、患者本人が様々な問題に対処し、生活上の努力や工夫を継続していかなくてはならないが、自宅での生活を維持しながら化学療法を受けている患者にとっての悪性リンパ腫とともに生きる意味を探求する研究や、体験を当事者の視点から記述する研究はない。

II.　研究目的

自宅での生活を維持しながら外来化学療法を受ける悪性リンパ腫患者の体験を当事者の視点から記述すること。

III. 研究方法と対象

1.　研究対象

研究対象者は、以下の条件に全て当てはまり、研究参加の同意が得られた20歳以上の者

大阪大学医学部附属病院[1]、大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻[2]

とした。(1)悪性リンパ腫と告知されている,(2)現在外来化学療法を受けているか外来化学療法を終了して1年以内である,(3) 他者の介助を受けることなく日常生活を送っている,(4)自己の体験を語ることに同意している。

2. データ収集期間

2009年6月から2009年9月

3. データ収集方法

1) 対象者の募集と選定

悪性リンパ腫の全国規模のA患者会の役員に研究の趣旨を説明し、理事会の承認をもらい、会員に研究参加者の募集を行う許可を得た。その後患者会が主催する茶話会に出席し、会員に研究目的と対象の条件を記載した研究趣意書を配布して参加者の募集を行った。この茶話会は患者の情報交換や先輩患者からのアドバイス提供を目的に3カ月に一度開催されており、参加者は患者や家族、友人で、匿名での参加も認められており、通常50名前後が参加しボランティアによって運営されている。研究参加の意思を表明した人には、研究者が直接会い、プライバシーが確保される個室で、個別に説明書と口頭で研究目的と意義、具体的な方法について説明し、文書で同意を得た。

2) データ収集方法

面接は対象者の希望する場所でプライバシーが確保される個室を用意して行い、面接日は、化学療法当日を避け、対象者の体調や都合に合わせて日時を設定した。1人の対象者に、2回を目安に面接を行い、1回30分～1時間以内を目安としたが、対象者の希望があれば時間を延長してできるだけ自由に語ってもらうようにした。

初回面接では年齢や今までの治療についてなど対象者の属性に関する項目についても質問した。初回面接は信頼関係を築くことや「化学療法を継続しながらがんとともに生きることについてどのように考えたり体験したりしているか」を中心に語ってもらうことを目的とし、2回目は初回面接の内容を対象者に確認してもらいながら、さらに詳しく体験を語ってもらったり1回目の面接後思い出したことを語ってもらったりする目的で行った。化学療法を終了している対象者は、外来化学療法を受けていた時を回想して語ってもらった。面接内容は、承諾を得て録音し、面接終了後はできるだけ早く逐語的に書き起こすとともに、面接時に観察された雰囲気、対象者の表情やしぐさを記録した。

4. 分析方法

年齢や今までの治療の経過など対象者の属性については、対象者の体験を理解する基礎情報とした。語られた内容についてはGiorgi[17]、広瀬[18)19)20]、片岡[16]、篠塚[21]によって示された現象学的アプローチを参考に作成した以下の手順で分析した。

個別分析；(1)逐語録を何度も読み返し、体験全体の意味を捉えた。(2)対象者にとって重要または印象深い出来事や体験、そこから生まれた大切な考えや思いについて語られている場面を抜き出し、それを具体的に理解できるように、対象者の主観的な立場から表現した。(3)(2)で表現された内容を、客観的な言葉や概念に置き換えながら、それぞれの中心的な意味を導いた。

全体分析；(4)(3)をもとに、類似した場面、類似した意味内容を統合し、体験の本質を見いだした。(5)(4)において導かれた全対象者の体験の本質で内容が類似しているものを集め、それぞれのまとまりごとに共通する意味内容を表す名称をつけ、悪性リンパ腫患者の体験の本質とした。(6)(5)の中で、さらに意味の類似するものを集めて、その内容を表現するように表題をつけ悪性リンパ腫患者の体験の意味とした。(7)体験全体と(6)で集約した悪性リンパ腫患者の体験の意味の本質的な関係を洞察しながら、現象全体の構造を図式化し、それをもとに悪性リンパ腫患者の体験をストーリーとして丁寧に記述した。

5. 真実性の確保

対象の主観的体験を反映させ語りを引き出すため、事前に面接の練習を行ってから臨んだ。1回目面接終了後に語られた内容を基に対象者の体験の予備的分析を行い、2回目面接時に図示して対象者に提示し、内容の確認を行った。また、研究の全過程を通して、質的研究の経験が豊かでがん看護実践の経験が豊富なスーパーバイザーから定期的に指導を受けた。

6. 倫理的配慮

対象者には、研究の目的や方法、研究参加

あるいは辞退・参加中止の自由、研究を断っても不利益は被らないこと、いつでも研究について質問ができること、面接内容を録音すること、プライバシーは保護されることが記載された研究説明書および承諾書をもとに説明し、書面で同意を得た。面接前、中、後に体調を確認し、面接が対象者の負担とならないよう留意した。面接中いつでも中断の申し出ができること、答えたくない質問は強要しないことを面接前及び面接中に対象者に伝えた。そして、過去の体験を想起することに伴う否定的感情の誘発に注意し、対象者の表情や態度を観察しながら面接を行い、精神的苦痛が生じないよう面接内容に配慮した。なお、本研究は研究者が所属する施設の倫理委員会の承認を得た。

IV. 結果

1. 対象の概要

対象の条件に当てはまる3名が研究参加に同意し、データが得られた。対象者の内訳は、男性1名、女性2名、平均年齢は55.3歳（51歳～62歳）であった。面接回数は各対象者につき2回で、1回の平均面接時間は120.55分間（78.58～144.2分間）であった。対象者の概要は表1に示す。

2. 自宅での生活を維持しながら化学療法を受けている患者にとっての悪性リンパ腫とともに生きる体験

個別分析結果である各対象者の体験の本質を2段階で統合した結果、自宅での生活を維持しながら化学療法を受けている患者にとっての悪性リンパ腫とともに生きる体験として、9の悪性リンパ腫患者の体験の意味が得られた。悪性リンパ腫患者の体験の本質および悪性リンパ腫患者の体験の意味の一覧は表2に示す。

集約した悪性リンパ腫患者の体験の意味同士の本質的な関係を洞察しながら、悪性リンパ腫とともに生きる体験全体の構造を図式化したところ、図1のとおりとなった。それは、『悪性リンパ腫患者は、がん罹患に伴う苦悩におびやかされて、自己を守ろうと必死の努力をする。そのような状況においても倒れないで何とかあがき続けている中で、家族に支えられる体験や、人生の中で起こるさまざまな出来事からさまざまな気づきを得る体験を積み重ねていく。悪性リンパ腫患者はこの体験を礎にして、失ったコントロールを取り戻すべく具体的な取り組みを重ね、人生のコントロールを取り戻していく。がんに罹患したことは消えないため、がんをかかえて生きることへの不安は消えず、他の人とは違ってしまって苦悩を分かち合えない孤独を感じるが、人生のコントロールを取り戻したことに力を得て、「私」の深まりと生の充実や、感謝、

表1 対象者の概要

	対象者		
	A	B	C
年齢 性別	60歳代 女性	50歳代 女性	50歳代 男性
診断名	濾胞性リンパ腫	濾胞性リンパ腫	びまん性大細胞性B細胞性リンパ腫
治療経過	約2年7カ月前に発症し外来で化学療法1回目を受けたが腫瘍サイズ不変。1年間経過観察(Watchful Waiting)後、2回目の外来化学療法を受け、腫瘍サイズ縮小したが残存している。	約16年6ヶ月前に発症し入院で化学療法1回目を受け完全寛解となるが、ほぼ1年おきに再発・再燃を繰り返し、入院して化学療法を受ける。3回目の再発から外来での化学療法を開始。その後も寛解と再発を繰り返し、現在5回目再発で外来化学療法中である。	約2年6ヶ月前に徐々に強くなる腰痛と臀部から下肢にかけてのしびれが出現して発症。確定診断がつくまで6ヶ月かかる。その間に歩行不能となり、膀胱直腸障害が出現など症状が進行したため入院で化学療法を受け症状が緩和されてから退院。退院後は外来で化学療法を受け治療終了となる。
面接時の状態・治療	外来化学療法終了し10ヶ月目 経過観察(Watchful Waiting)中 残存腫瘍増大あれば3回目化学療法予定で評価のCT検査を1ヵ月後に控えていた 現在特に症状なし ADL自立	5回目再発にて外来化学療法(RF療法)中 現在特に症状なし 1回目面接と2回目面接の間に腰部に帯状疱疹出現、RF療法3回目が1週間延期され、2回目面接は2週間延期 ADL自立	完全寛解維持 外来化学療法終了し4ヶ月目 腰痛(オピオイド内服でコントロール)と臀部から下肢のしびれ(左＜右)、下肢筋力低下(左＜右)が残存しており杖で歩行自立し2ヶ月目 ADL自立 1回目面接1週間前から仕事復帰
面接	2回 (1回目78.58分間/2回目132.36分間)	2回 (1回目132.13分間/2回目101.13分間)	2回 (1回目134.00分間/2回目144.20分間)
面接場所	Aの自宅	Bの通院先近くにある公民館の個室	Cの自宅近くにある公民館の個室

平穏を獲得する。』と記述できた。

1) 体験の内容

以下に悪性リンパ腫患者の体験の意味について説明し、それぞれの悪性リンパ腫患者の体験の意味を代表するインタビューデータを示す。

【悪性リンパ腫罹患に伴う苦悩】：悪性リンパ腫と診断、告知されて、がんに罹患した絶望感、未知の病気や差し迫る死への恐怖感、そのつらさ怖さを誰とも分かち合えない孤独感に自己をおびやかされる体験である。《不幸を嘆く》《死におびえる》《医療への不満を抱く》《怖さつらさを誰にも支えてもらえない孤独》《つらい入院生活》の5の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*私、がんやねんって泣いてお友達にでも言えたらよかったけど、つい相手のことを考えてしまうから、－中略－言えない、誰にも。*」（対象A）

【自己を守ろうと必死の努力をする】：【悪性リンパ腫罹患に伴う苦悩】に自己をおびやかされながら、打ちのめされまいと何とか自己を保とうとする体験である。《残された日常にすがり耐え忍ぶ》《あがき続ける》の2の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*外泊した時には、買い物して洗濯して掃除して晩ご飯作って、あと2，3日分冷蔵室・冷凍室にストックして、病院に戻る。病院に帰ったら寝込む。*」（対象B）

【立ち上がる努力をする】：【立ち上がる礎】を支えに、身体、社会、家庭、医療などさまざまな方面から自らの人生を立て直そうと具体的な取り組みをする体験である。《立ち上がる努力をする》の1の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*仕事始めてすぐ再発ですって言われて、でも私仕事辞めるの嫌だから、－中略－病院を変わった。通院治療をそこで考えてもらって、仕事続けながら通院治療を始めた。*」（対象B）

【立ち上がる礎】：治療を継続する過程で家族や同病者、友人、医療者らと交流し、独りではない自分や生かされている自分に気づいたり家族に支えられたりして、悪性リンパ腫に罹患し打ちのめされていた状態から自らの

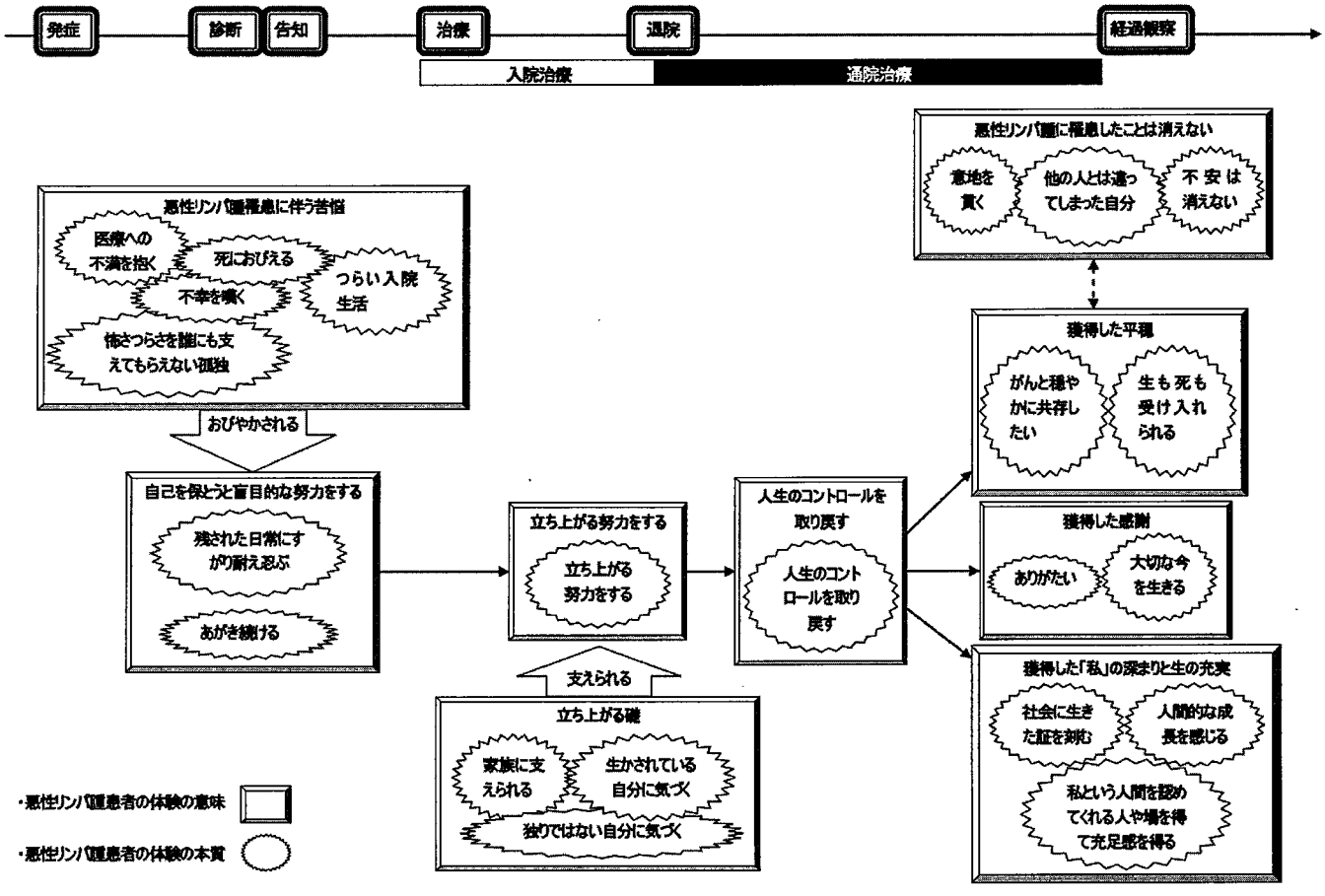

図1 自宅での生活を維持しながら化学療法を受けている患者にとっての悪性リンパ腫とともに生きる体験の構造

力で立ち上がる力を得る体験である。《家族に支えられる》《独りではない自分に気づく》《生かされている自分に気づく》の3の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*親父が先に。身代りに逝ってくれたような感じだった。－中略－せっかく延びた命だから、やるだけ家のことをキッチリやってと思って。*」(対象C)

【人生のコントロールを取り戻す】:【立ち上がる礎】を支えに【立ち上がる努力】をした結果、治療を乗り切る自信を持ち生きる気力を回復する体験である。《人生のコントロールを取り戻す》の1の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*病院は病院でちゃんと行くし、遊びにも行くし、患者会とかもするし、息子の所の手伝いもするし、色んなことが全部出来るように自分で調整してるから、だから自分で満足できるのかな。*」(対象B)

【獲得した「私」の深まりと生の充実】:悪性リンパ腫になって成長した自己を振り返り自分の人生の中で悪性リンパ腫になったことを肯定的に受け入れる体験である。《人間的な成長を感じる》《私という人間を認めてくれる人や場を得て充足感を得る》《社会に生きた証を刻む》の3の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*弱い人のために、又自分と同じような病人の困ったこととかね、そんな立場の人の役に立つような仕事をしたいなと思うんです。*」(対象C)

【獲得した感謝】:がんと穏やかに共存して生きていることや命のありがたさに気づく体験である。《ありがたい》《大切な今を生きる》の2の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*こんなに深くね、生きてるってすごいんだなって。－中略－感動がすごいあるよ。*」(対象A)

【獲得した平穏】:がんと共存する姿勢を自ら獲得し精神的安寧を得る体験である。《生も死も受け入れられる》《がんと穏やかに共存したい》の2の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*闘うんじゃなくて、私の場合は、静まってねっていう感じね。リンパ腫さん、静まってねっていう感じの、祈りですかね。*」(対象A)

【悪性リンパ腫に罹患したことは消えない】:悪性リンパ腫とともに生きる自分の苦悩や努力を分かち合えず社会との隔たりを感じる体験である。《不安は消えない》《他の人とは違ってしまった自分》《意地を貫く》の3の悪性リンパ腫患者の体験の本質から構成された。

「*がんイコール死ってみんな思ってる。－中略－私をみて貰えなくなるんじゃないかって思いになる。*」(対象B)

表2　悪性リンパ腫患者の体験内容

各対象者の体験の本質	悪性リンパ腫患者の体験の本質	悪性リンパ腫患者の体験の意味
不幸を嘆く(A-1)(B-1)	不幸を嘆く	がん罹患に伴う苦悩
差し迫る死におびえる(B-2)(C-1)	死におびえる	
医療への不満を抱く(A-2)	医療への不満を抱く	
医療について不満を抱くが仕方ないと諦める(C-2)		
怖さつらさを誰にも支えてもらえない孤独(A-4)	怖さつらさを誰にも支えてもらえない孤独	
家族に支えてもらえず孤独である(B-3)		
入院生活はしんどいものであった(A-5)	つらい入院生活	
残された日常にすがり耐え忍ぶ(A-3)(B-4)	残された日常にすがり耐え忍ぶ	自己を守ろうと必死の努力をする
打ちのめされつつもあがき続ける(C-3)	あがき続ける	
立ち上がる努力をする(A-8)(B-6)(C-8)	立ち上がる努力をする	立ち上がる努力をする
母親の存在に支えられる(A-6)	家族に支えられる	立ち上がる礎
独りではない自分に気づく(A-7)	独りではない自分に気づく	
生かされている自分に気づく(B-5)(C-5)	生かされている自分に気づく	
治療を乗り切る自信をもつ(A-9)	人生のコントロールを取り戻す	人生のコントロールを取り戻す
人生のコントロールを取り戻す(B-8)		
手ごたえを得る(C-4)		
病気は人生を豊かにしてくれた(A-11)	人間的な成長を感じる	獲得した「私」の深まりと生の充実
自己の成長を感じる(C-7)		
私という人間を認めてくれる人や場を得て充足感を得る(B-7)	私という人間を認めてくれる人や場を得て充足感を得る	
社会に生きた証を刻む(C-9)	社会に生きた証を刻む	
ありがたい(A-10)(B-10)	ありがたい	獲得した感謝
大切な今を生きる(A-13)(B-9)	大切な今を生きる	
生も死も受け入れられる(A-12)	生も死も受け入れられる	獲得した平穏
自らの存在を生命や時間の流れの中に位置づける(C-6)		
がんと穏やかに共存したい(A-14)	がんと穏やかに共存したい	
不安は消えない(A-15)	不安は消えない	がんに罹患したことは消えない
再発への不安を感じる(C-10)		
分かち合えない孤独(A-16)(B-11)	他の人とは違ってしまった自分	
がんになって変わってしまった自分を感じる(C-11)		
意地を貫く(B-12)	意地を貫く	

V. 考察

1. 悪性リンパ腫罹患に伴う苦悩

悪性リンパ腫と診断され告知された当初、さまざまな苦悩を抱えるが、苦悩の中心は≪怖さつらさを誰にも支えてもらえない孤独≫であった。悪性リンパ腫は近年増加傾向の悪性腫瘍であるが、罹患率が人口10万人あたり11.5人[22]で、胃がんの53.4人[22]や大腸がんの48.4人[22]に比べると稀な悪性腫瘍であり、加えて同じ造血器腫瘍の白血病と比べて認知度が低い。悪性リンパ腫に限らず病むという体験は孤独を感じるものであるが、その中でも悪性リンパ腫患者は、自分も周囲の人も知らない、分からない病気になってしまったという孤独を抱えやすいと考えられる。また、悪性リンパ腫の理解にあたって、ほかの悪性腫瘍に比して亜型の数が多く煩雑であることと度重なる分類の変遷が、大きな障壁となっていると指摘されている[23]。現在広く使用されているＷＨＯ分類では30種類以上細分化されており、悪性リンパ腫の治療や予後はその

組織型に依存するため、患者にとって病気や治療とその見通しに対する理解が難しい。悪性リンパ腫患者は、自分の病気を十分理解できないままに治療を開始している可能性が考えられる。このことは、≪死におびえる≫、≪不幸を嘆く≫、≪医療への不満を抱く≫、≪つらい入院生活≫といった苦悩を助長するものである。

2. 立ち上がる礎を得て自ら立ち上がる努力をするにいたるプロセス

悪性リンパ腫患者は、がん罹患に伴う苦悩におびやかされて、家事などの日常を必死で保とうとしたり自分で行動してあがき続けたりと、何とか打ちのめされないように必死の努力をしていた。告知に関連した患者の困難とその対処に関する研究[24]において、告知時の「がんの進行・転移への不安」「社会・経済的基盤崩壊への不安」「がんである自分を受けとめること」などの困難への対処として、がんへの立ち向かい、身近な人への支援の求めるなどのほか、不安から遠ざかる、普段の状態と変わりなく過ごし平静を装うなど、がんという脅威に対して直面化せずに、遠ざかってこれまでの安定を保ち脅威を最小化しようとするものもみられたと報告されている。本研究結果もこの結果に一致するものであると考える。

このような必死の努力を続けるなかで、悪性リンパ腫患者は、病気にとらわれ孤独であった世界から自分の存在が認められる病気以外の世界に視界が広がる体験をしていた。対象者Aは、同病者との交流で病気で苦しんでいるのは自分だけではないと感じたり、友人からの共感やねぎらいに喜びを感じたりして、独りではない自分に気づいた。対象者B、Cは親を亡くしたことをきっかけに生かされている自分に気づいた。苦悩に直面した患者が、必死の努力を続ける中、周囲の人々との情緒的交流を助けに「自ら気づくことができる」状態に徐々に変化してきていたからこそ、このような立ち上がる礎となる気づきを得たと考えられる。つまり、悪性リンパ腫に伴う苦悩に直面し自分ひとりではどうにもならないと思い知った悪性リンパ腫患者は、他者の支えによって自分は独りではないと認識することで、病気以外の世界に目が開かれるのだと考えられる。片岡[16]は、周囲の人々の手段的・情動的支援は患者の生活の営みを支えるだけでなく、患者が自らの存在価値を認識して、孤立感にとらわれた状態から生きるための活力を復活させる源泉となると述べている。悪性リンパ腫患者にとって、周囲の人々との関係が立ち上がる力の源となると考えられる。

3. コントロールを取り戻して意味を見いだしていくプロセス

悪性リンパ腫罹患に伴う苦悩を抱える患者は、周囲の人々との関係に支えを得て深い孤独から脱却し、立ち上がる努力をする中で人生のコントロールを取り戻していく。このコントロールの取り戻しはすべての対象者において、外来化学療法移行と日常生活の取り戻しと重なっており、セルフケアなど否応なく求められた生活の自立が心理的自立へつながり、コントロールを取り戻すにいたったと考えられる。

一方で悪性リンパ腫患者は、悪性リンパ腫とともに生きる自分の苦悩や努力を分かち合えず社会との隔たりを感じる体験をしていた。外来で化学療法を受けながら生活するがん患者は、がんとともに生きることの脅威や今より状態が悪化することへの懸念、死を意識する辛さ、自分らしく生きることへの揺らぎといった困難[25]や、今まで分かりあえていた他者との関係が変化する社会的苦痛を抱えている[10]との報告に一致する。

しかし悪性リンパ腫患者は孤独を感じながらも、人生のコントロールを取り戻したことに力を得て、「私」の深まりと生の充実や、感謝、平穏を獲得していく。これは、深い孤独や死と直面する中で得た自分は生かされているという認識や必死の努力から培った生きる強さが、意味を見出していくことへ拡がったと考えられる。対象者は悪性リンパ腫になって成長した自己を振り返り、自分の人生の中で悪性リンパ腫になったことを肯定的に受け入れ、「仕事を通じ社会貢献したい」「自身の体験をほかの患者の役に立てたい」と社会的な自己の存在価値を拡張させ、「大切な今を生きたい」「がんと共存したい」と思うようになっていた。悪性リンパ腫患者は、周囲の人々との絆を深め人生を見直すなどの体験を通して、病気になった自己と和解し現実を受

け入れ、体験を社会にも広く活用するなど自己の存在価値や新たな可能性を見いだしていくと考えられる[8)26)]。

4. 研究の限界と今後の課題

本研究は、対象者が少なく、悪性リンパ腫患者全ての体験を反映していない。また、悪性リンパ腫全ての型を含み、病型、再発経験の有無を特定しなかった。悪性リンパ腫は再発の有無だけではなく病型によっても治療や予後が異なることから、病型や進行段階の相違に影響を受けていたと考えられる。そのため今後は対象者を増やし、病型や再発の有無について特定したうえで検討する研究を行うことが必要である。また、本研究は患者会に入会している人を対象としたため、自ら同病者からのサポートを必要とし、ピアサポートを積極的に受け入れる意思のある人であったと考えられ、結果にみられた対象者の前向きさや意味の獲得のプロセスに影響していたと考えられる。そのため今後は患者会に入会していない人びとを含めて研究を行うことが必要である。

本研究は面接によってデータを収集し、現象学的アプローチによって分析したが、研究者は看護面接、現象学的アプローチに関して学びの途上にある。面接によるデータ収集は、研究者の現在の力量によって得られるデータが異なるという限界がある。また、現象学とは終わりのないプロセスで完全な還元は不可能だといわれており、今後の学びによって異なる現象学的解釈が生まれる可能性がある。

今後の課題は、患者が意味を見出すための看護ケアを検討することである、

5. **結論**

悪性リンパ腫患者は、「悪性リンパ腫罹患に伴う苦悩におびやかされ打ちのめされまいと懸命な努力をする中で、周囲に支えられながら気づきを得る体験を積み重ねていくようになる。この体験を礎にして、立ち上がる努力を始め、人生のコントロールを取り戻していく。悪性リンパ腫に罹患したことは消えないため、悪性リンパ腫をかかえて生きることへの不安は消えず、他の人とは違ってしまって苦悩を分かち合えない孤独を感じるが、人生のコントロールを取り戻したことに力を得て、「私」の深まりと生の充実や、感謝、平穏を獲得する」という体験をしていた。

謝辞：本研究に快くご協力くださいました対象者の皆様に深くお礼申し上げます。

引用文献

1) 石垣靖子，濱口惠子，手島めぐみ　他：わが国の外来化学療法におけるケアシステムおよび看護実践に関する調査研究，日本がん看護学会誌，21巻2号；73-86，2007
2) 神田清子，飯田苗恵，中村美代子：がん化学療法を受けた造血器腫瘍患者の自尊感情およびその関連因子，がん看護，1巻；242-247，1996
3) 長津恵，大木郁美，川越洋子　他：外来化学療法患者のセルフケア能力に影響を与えている要因，日本看護学会論文集：看護総合，38号；448-450，2007
4) 有賀昭子，遠藤香苗，中山泉美　他：外来化学療法を受ける患者の倦怠感による日常生活への影響と対処行動の実態，日本看護学会論文集：成人看護Ⅱ，37号；65-67，2006
5) 津曲竜一，大田いつ子，倉岡美香　他：がん化学療法を受ける患者の入院治療と通院治療における QOL の比較と対策，日本看護学会論文集：看護総合，38号；288-290，2007
6) 甲斐佐奈美，南口真由美，大木奈美子　他：外科外来でがん化学療法を受ける患者のニーズ，中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌，Vol. 2, No. 1；12-15，2006
7) 佐藤かおる，森田京子，長谷川博美　他：化学療法の効果が現れにくくなっている患者の「生きること」への思い，日本看護学会論文集：成人看護Ⅱ，37号；62-64，2006
8) 矢ヶ崎香，小松浩子：外来で治療を続ける再発乳がん患者が安定した自分へ統合していく体験，日本がん看護学会誌，21巻1号；57－65，2007
9) 瀬山留加，神田清子：化学療法を受けながら転移や増悪を体験したがん患者の治療継続過程における情緒的反応と看護支

援の検討，日本がん看護学会誌，21 巻 1 号；31-39，2007
10) 鳴井ひろみ，三浦博美，本間ともみ　他：外来で化学療法を受ける進行がん患者の看護援助に関する研究（第 1 報）―外来で化学療法を受ける進行がん患者の心理社会的問題―，青森保健大雑誌，6 巻 2 号；19-26，2004
11) 射場典子，小松浩子，中山和弘　他：外来・短期入院において継続治療を受けながら生活しているがん患者の適応に関する因果モデルの検討，日本がん看護学会誌，19 巻 1 号；3-12，2005
12) 松田光信，八木彌生：末梢血幹細胞移植を受けたＡさんのライフヒストリー　新生自己の創出，日本看護科学会誌，26 巻 1 号；13-22，2006
13) 石坂邦枝，阿久澤由里，五十里美保，田中倫子，藤野文代：自家末梢血幹細胞移植患者における STAI・危機モデルに基づいた看護の検討　クリーンルーム入室前後の分析，群馬保健学紀要，23 巻；69-75，2003
14) 金田佳代，山本道代，渡辺純子　他：造血幹細胞移植しか根治的治療がない患者の前向きな思い，新潟県立がんセンター新潟病院看護部看護研究平成 18 年度；80-85，2007
15) 姫野寿代，阿南亜矢，澁谷幸洋：造血幹細胞移植を意思決定する要因について再発し決定に迷いがあった 2 事例を通して，日本看護学会論文集: 看護総合，37 号；116-118，2006
16) 片岡純：外来治療期および寛解期にある悪性リンパ腫患者が病気を克服するための統御力（Mastery）の獲得を促進する看護，千葉大学大学院看護学研究科博士論文，2004
17) Giorgi, A 著：早坂泰次郎　監訳：現象学的心理学の系譜　人間科学としての心理学，勁草書房，東京，1981
18) 広瀬寛子：看護面接の機能に関する研究透析患者との面接過程の現象学的分析（その 1），看護研究，25 巻 4 号；367-384，1992
19) 広瀬寛子：看護面接の機能に関する研究透析患者との面接過程の現象学的分析（その 2），看護研究，25 巻 6 号；541-566，1992
20) 広瀬寛子：看護面接の機能に関する研究透析患者との面接過程の現象学的分析（その 3），看護研究，26 巻 1 号；49-66，1993
21) 篠塚裕子，稲垣美智子：病院で死を迎える終末期がん患者の家族の添う体験，日本看護科学会誌，27 巻 2 号；71-79，2007
22) がんの統計編集委員会編：がんの統計’09，財団法人がん研究振興財団，東京，2009
23) 豊崎誠子，大間知謙：理解すべき悪性リンパ腫の臨床像―よく出会う病型、特徴的な病型―，Medical Practice，24 巻 11 号；1951-1958，2007
24) 小松浩子，小島操子，鈴木久美　他：がん告知を受けた患者の主体的ながんとの共生を支える援助プログラムの開発に関する研究（1）告知に関連した患者の困難とその対処に関する分析，死の臨床，19 巻 1 号；39-44，1999
25) 林田裕美，岡光京子，三牧好子：外来で化学療法を受けながら生活するがん患者の困難と対処，広島県立保健福祉大学誌人間と科学，5 巻 1 号；67-76，2005
26) 藤田佐和：退院後のがん体験者の適応過程における拡がり，高知女子大学看護学会誌，31 巻 1 号；5-18，2006

EXPERIENCE OF LIVING WITH THE MALIGNANT LYMPHOMA FOR THE OUTPATIENTS WHO ARE UNDERGOING CHEMOTHERAPY

Shizuko Motoda, Yuka Hayama, Fumiko Oishi

Abstract

PURPOSE: To describe the experience of patients with malignant lymphoma undergoing chemotherapy at home from their own viewpoint. METHOD: We had them talk freely about how they thought about experience to live with a malignant lymphoma. We analyzed their talk qualitatively. RESULTS: The malignant lymphoma patients had an experience as follows: Although they were under the threat of suffering from the disease, they would make every effort not to yield to the threat. By doing so, they were able to accumulate experiences supported by people around them to realize that they were not alone. With the experience they would begin to get on their feet and they could regain the control of life. Because the uneasiness to live holding a malignancy would not fade away, they still felt loneliness that they could not truly share the suffering with other people. However, by obtaining power from having regained the control of life, they acquired their spiritual growth and fulfilling life along with thankfulness and their peace of mind.

Keywords: meaning to life, narrative, malignant lymphoma, outpatient chemotherapy